

山根 昭六（やまね・しょうろく）

1、プロフィール

20 年以上にも及び肺疾患と闘いながら、短歌、小説等を創作し続けた。27 歳の頃に構想され書かれた長編『人間序曲』が、没後に友人たちの手により発刊された。

<生没>

1928(昭和3)年2月8日 ～ 1975(昭和 50)年1月 27 日

<代表作>

作品集『人間序曲』

<青森との関わり>

八戸市湊町に生まれる。十代の終わり頃から文芸活動を始める。同人誌「義眼」(八戸で発行)等に作品を発表。

2、作家解説

昭和3年八戸市湊町に生まれる。19 歳の頃から短歌や詩などを書き始め、職場の機関誌に発表。この頃、埴谷雄高の『死霊』に感銘を受け、以後繰り返し読む。20 歳に入ると短編小説を執筆し出す。昭和 24 年、21 歳の時に詩人の村次郎を初めて訪れる。この年の7月に肺結核で入院するが、2年余りの闘病生活後、昭和 26 年に退院。入院中、病床でペンを取ったり、外国文学(主に実存主義傾向のもの)を耽読する。昭和 27 年に再入院し、再び2年の療養。この間、短歌を木村靄村主宰の「玄土」に発表。退院後の昭和 30 年に長編小説の執筆に意欲を燃やし「人間序曲」を構想する。昭和 32 年より詩誌「義眼」(後に「あるふあ」と改題)に散文詩などを発表し、同人の大久保景造等との交遊が始まる。またこの頃から文芸誌「世代」(八戸市)に長編小説「人間序曲」のうちの数編を発表。昭和 34 年に上京し、長編小説「地の塩」を書き始める。翌昭和 35 年に作業中の負傷や体力の限界等から帰郷する。

昭和 36 年 33 歳の時に、中里進の勧めで、創作集『逆塔』を出版。昭和 38 年病気再発により通院し、翌昭和 39 年に入院。昭和 42 年には日赤病院に移るが、一時症状が急激に悪化。昭和 43 年にミニコミ誌「うみねこ」主宰の吉田勇作に原稿を託し、保管を依頼。昭和 48 年 45 歳の時に、その才能に嘖目し、創作活動を励まし続けた中里進に「退院はかなわぬ。吉田勇作氏に託した原稿の保存、活用を頼む。」と私信する。この時、盲腸の化膿に長く苦しんだ。2年後の昭和 50 年 1 月に呼吸困難となり、永眠。その年の 4 月友人知人により「遺稿編纂会」が発足し、昭和 51 年 1 月に『人間序曲』が出版された。(参考引用文献、作品集『人間序曲』の「年譜」)

3、資料紹介

○『人間序曲』

図書

1976(昭和 51)年 1 月 27 日

215mm × 155mm

「怪死」「青と白」「こうもり」「街」から成る千枚の長編小説。実存主義的な色彩が濃く、必ずしも容易に読み進めはしないが、病苦と戦いながら、完成させた作者の情熱が伝わってくる。